



1870s



1900s



1910s



1940s



1970s



2010s

北海道大学150年史 編集ニュース

第3号 2019年7月31日

目次

〔巻頭コラム〕“激動”の1954年

林恒子 2

北大歴史ノート 第3話

外国語会の英語・ドイツ語劇 4

北大風景グラフⅢ

中央講堂からクラーク会館へ 5

〔資料紹介〕収蔵庫さんぽ 6

〔活動紹介〕日誌 pick up 7

編集後記等 8

〔巻頭コラム〕

“激動”の1954年

林 恒子

(文学部1958年卒業、旧姓・広瀬)

私が北大に入学した1954年は約1,000名の合格者中、女子は32名、文類・理類にほぼ同数いたと思う(水産類については記憶がない)。文類は第二外国語ドイツ語選択3クラス、フランス語選択1クラスに分かれ、女子は半数がフランス語クラスに、残りはドイツ語クラスに3・1・4人と配分された。私は1人のクラスだったので事務室に行き「なぜ1人なのか、不便なことも考えられるので配慮してほしい」と申し出たが全く相手にされなかった。

大学婦人協会が北大、学芸大(現在の北海道教育大学)、藤女子短大など合格の女子学生6名に、バザーの収益などで奨学金を下さった。授与式には北海道婦人少年室長も参加された。

1954年は厳しい事件の起きた年である。3月は第五福竜丸がビキニ水爆実験で被曝、9月は15号台風による洞爺丸など青函連絡船の遭難と大雪山系森林の甚大な風倒被害、岩内大火や深川西高あゆみ会事件。そして千余名の首切りの撤回を求める日鋼室蘭争議は半年を越えた。

札幌南高で私の期だけ1年は男子理科・女子家庭科5単位必修というカリキュラムに憤慨。進路調査で女子の半数、男子のほとんどが進学志望という結果に驚き、「経済的自立」をめざして北大を受けたが、合格発表までの間に建築学科をトップで卒業する女子学生が就職先未定と報じられ、暗い気持ちになった。「入学は人生を4年延ばすだけ!」「体験できることを体験しよう!」という気持ちで8月6日、狸小路や大通公園で「原水爆禁止」を訴えるビラまき・署名活動に参加した。

12月は奈良女子大を会場に、第二回全日本女子学生大会が開かれ、北大から8名が、「女子学生の会」の集めたカンパで派遣された。1年生は新聞会所属で法学部志望の広田良子さん(故人)と教養部歴史研究会所属の私である。文

学科(国文学)3年の今井泰子さん(故人)と私は途中室蘭に寄り、日鋼室蘭労組青年部に支援カンパを届け主婦会の方々と懇談した。鈍行の車中泊で少し年下の女性達と話すと、清里から秋田に帰る農家の娘さんたちで、雪どけの頃から住み込みで働いていたという。

女子学生大会については12月8日付『北海道大学新聞』399号(以後『北大新聞』と略す。月刊、ブランケット版2頁)の一面に、[奈良にて広田記者発]と3段の記事が掲載された。「“団結で権利自由を守ろう” 奈良で全国女子学生大会開く」の2段見出しで「全国一一三校五二六名の代表、千名以上のオブザーバー」が女子大講堂に参加、初日は一般報告後「神近市子氏、奈良女大学長」、「奈良総評議長、総評婦人部長、奈良県知事」、「京大、広島大、明大自治会」、「北大平和大会等五九団体からのメッセージ、祝電」を受けたとある。

報告の中では、女子学生の就職難＝男女平等の事実上否定など深刻な状況が強調された。二日目は7分科会に分かれて、①アルバイト、②授業内容・教育制度、③自治会・サークル活動、④就職の不振、⑤平和の問題、⑥家庭での女性における討議を簡略に紹介、三日目に全体方針を出す「詳報次号」と予告したが続報はない。帰札後、B6判20頁ガリ版刷りの報告集を作り2回も報告会を開いたので、新聞掲載は省略されたのだろうか。報告集には⑦寮問題の報告もある。私は「平和の問題」分科会に参加した。

前年の大会は、東京で全国56校200余人参加、家庭の封建性・就職難など語り合い、教育や就職の機会均等・平和憲法擁護等を要求したと『現代婦人運動史年表』1963にある。

北大の「女子学生の会」は、1955年12月10日付『北大新聞』410号の「サークルめぐり」には1951年結成とある。女子寮、トイレ、控室等

の設置を要求し、私の入学した頃は一応それらが実現した時期で、新入生歓迎会における先輩方は、北大女子で司法試験初合格の大越恵子さん(のち弁護士、故人)はじめ、とても貫禄があった。

教養部控室は、自習、昼食、歓迎会・卒業送別会や「女子学生の店」運営の打ち合わせにも使われた。「店」とは夏休み中、植物園内に学生課から借りたテントを設営し、入園者にジュースやパンなど売る自主アルバイトで、希望者が毎日交代で売り子を務めた。

1955年はバンドン会議など「雪どけ」ムード。夏休みの支笏湖畔に3泊4日のサマーキャンプは北大・学芸大・小樽商大・ドレメ(北海道ドレスメーカー女学院)などの参加人数476人と盛況で、翌年以降も続いた。

この年、世界母親大会(日本代表14名中北海道から2名)に対する協力をめぐり、女子学生の会の中で「母親大会」の名称に抵抗感をもつ者もいたが、「かつて母だったものも、これから母になるものも」の意味だと説得して多くのカンパを集めた。この後の女子学生の会や女子寮については、『蒼空に梢つらねて』2011の伊藤セツさん、岡部清子さん(共に1958年入学)の回想が詳しい。

教養部歴史研究会では、恵迪寮の日記で戦時中の勤労働員を調べたり、体験者に遠友夜学校閉校の頃を伺ったことがある。豊田四郎『日本資本主義発達史』や井上清編著『日本歴史講座』第7巻現代篇も講読した。1955年10月、前年結成の歴史学生懇談会の当番サークルとして開

催の会合では「財閥解体」「農地改革」をテーマにしたことが『北海道学歴協ニュース』No.9、No.10に記されている。この会は北大文学部史学科、学芸大札幌・岩見沢分校、小樽商大、藤女子短大などで組織され、持ち回りで交流した。

1956年9月15日は創立80周年記念式典がクラーク博士令孫を迎え農学部前庭で開催、同日付『北大新聞』417号は「八十周年記念特集号」で12頁建であった。「総合開発に寄与する北大」「学生を中心とした北大事件史」など興味深い。「北大教官紹介」の欄には理学部助教授桂田芳枝ら4名の女性も見える。しかし6頁の「女子学生の問題」と題した特集は「問題点を解剖する」という取材が社会通念的な感想にとどまり、女子入学を戦前から北大独自に認めた事実も戦後改革で保障された経緯も明記せぬ編集には改めて驚いた。

学部移行後まもなく史学科に発生した事件の体験は、『北大文学部五十年の歩み』2000に「藤井闘争と私」という題で記した。

初めて面接が実施されるようになった高等学校教員採用試験に合格、私は1958年から農村に6年、札幌に転じて定年まで勤めた。同期の大塚榮子さん(薬学部名誉教授、日本学士院賞受賞)の姿は、今年も北大HPの大塚賞受賞者講演会に見る事ができる。

《参考文献》

特集「わたしの戦後体験・戦後研究」『札幌の歴史』第39号・2000・札幌市、『北海道深川西高校「あゆみ会事件」』2014・森谷長能



「女子学生の店」の前にて(1956年8月23日)



女子学生に配られた記念ペンダント
(1956年9月)

北大歴史ノート 第3話

外国語会の英語・ドイツ語劇

1918年2月9日、“外国語会”が中央講堂において発表会を開催した。客席は北大生のほか、招待客、北星・北海・庁立の女学校生徒、中学生、市民で2階まで満員となった。午後2時半、マンドリンクラブの演奏によって舞台は幕を開け、以下の10演目が披露された。

1. マンドリンクラブ
2. 英語暗誦 “Spartacus to the Gladiators at Capua” (ケログ「カプアでのスパルタクスによる剣闘士達への独白」)
3. 四部合唱 “Mother I'm thinking most of you”
4. ドイツ語暗誦 “Zauberlehrling von Goethe” (ゲーテ「魔法使いの弟子」)
5. 英語劇 “Beauty Specialist”
(10分休憩)
6. マンドリンクラブ
7. ドイツ語暗誦 (ゲーテ「魔王」)
8. 独唱 “It is not raining rain to me”
9. 英語劇 “社会の敵” (イブセン「民衆の敵」)
10. ドイツ語劇 “Herrn Gimpels Verblendung” (「ギンペルの迷い」)

演目には、暗誦や合唱、声楽家L・レイクの独唱があった。目玉は外国語劇で、英語劇は予科第1年級による喜劇と、英訳のイブセン作品、ドイツ語劇はオリジナル脚本の喜劇だった。

*

この会は、1915年頃に英語教師のポール・ローランドを中心に組織した“英語会話倶楽部”から



出演者と教員たち(1918年2月)

はじまる。1917年頃、ドイツ語を加え“外国語会 (Foreign Language Society)”となった。

1918年の公演にも、予科の語学担当教師が参加していた。英語劇は末光信三やジョン・B・モルガンが指導し、ドイツ語劇の脚本はハンス・コラーとその妻による作(散文は夫、詩は妻)だった。さらに、掲載写真の裏面に書かれている「Mr. Narita」がドイツ語担当の成田秀三であれば、語学担当教師8名中4名が携わっていたことになる。

*

予科は、学部に進学するための高等学校相当の課程で、洋書を用いた学部での講義に備え、特に外国語の修得を重視していた。

たとえば、入学試験の英語の問題では、英訳や和訳のほか、書取(リスニング)が設けられた。1911年の受験者は、森本厚吉教授が3度読んだ後に回答する形式だったと回想している。

入学後は語学が授業の3～5割を占めた。1907年の予科設置当初は英語かドイツ語の一方を必修としたが、1909年から両方となり、週32～33時間の授業のうち、英語6・独語9(第1年級)、英語6・独語8(第2年級)、英語4・独語5(第3年級)を修めるカリキュラムだった。語学の必修は1919年から再びどちらか一方となったものの、第1・2・3年級での授業時間は、英語で8・6・6、ドイツ語で10・9・9となり、科目ごとではむしろ増加した。

外国語会には、予科生徒に限らず、学部学生もいた。1918年の参加者には、後に北大教授となる中村幸彦(予科第2年級)や枡内吉彦(農学科第三部第3年級)の名前もみえる。劇の練習では、表情を実演で教わるなど外国人教師と間近に接することもあり、学生たちは公演を経ると英語・ドイツ語会話が大胆になり楽になったという。

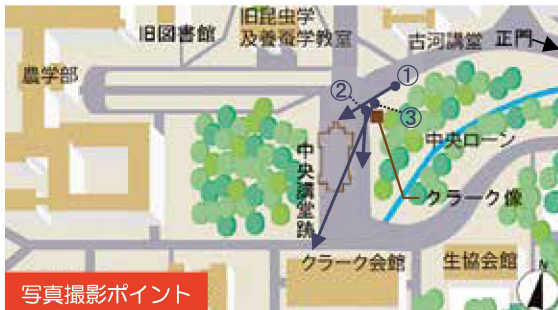
*

外国語会はその後も公演や絵はがきの販売などをおこなったが、1921年、活動に幕を下ろした。

《参考資料》

「第三回外国語会公開記事」『文武会々報』第83号・1918年、
「櫻井芳次郎君より」『文武会々報』第91号・1921年、土田
明廣「外語劇大会を復活せよ」『北海道帝国大学新聞』第
68号・第69号・1930年、正岡定雄「半世紀前の学都札幌を
思い出して」『札幌同窓会誌』第4号・1970年 (廣瀬)

北大風景グラフィック 中央講堂からクラーク会館へ



(『北海道帝国大学医学部第七期卒業記念』より)



(1952年春、丸山恵照氏撮影)



(2019年6月27日撮影)

札幌農学校は、1903年、北1条から現在の北8条キャンパスへと移転した。移転当初は全学的な大講堂がなく、式典などには図書館(左地図の旧図書館)の閲覧室を使っていた。

そこで登場したのが、中央講堂(1916年12月新築)である。当時のキャンパスは正門から農学教室(現在の農学部本館裏)に至る道沿いに各教室が並んでおり、中央講堂はちょうど道筋の中心、中央ローンの西隣に位置していた。講堂は吹き抜けの2階席を備え、約450名を収容した。

写真①は、中央講堂の正面玄関である。左に写るクラーク像は、1926年5月、創基50周年を記念する事業の一環で建立された。記念式典では中央講堂が会場の一部となり、正面玄関前に緑門が設営された。

中央講堂には、学会・講演会・音楽会・映画会などの会場として、学生・教職員や一般市民が集った。1931年5月に新渡戸稲造が最後に来学した際にも、その講演会は中央講堂で開催された。

写真②には、クラーク像の前で写生をする子どもたちと、それを見つめる学生が写っている。クラーク像は、金属供出により1943年6月に胸像が失われた後、台座のみが残っていたが、1948年10月、学生を中心とするクラーク先生胸像再建期成会の運動によって再建が叶った。中央講堂と、北大のシンボルであるクラーク像の周辺は、人々が集まる、大学の中心的な場であった。

1959年10月、中央講堂の南側に、クラーク会館が竣工した。クラーク会館は創基80周年を記念した学生会館で、課外活動の促進や、学生・教職員の福利厚生を目的とした。式典会場の役割も担い、1960年から1963年の入学宣誓式は、館内の講堂(600名収容)でおこなわれた。講堂のほかに、中央ホール・集会室・食堂・喫茶部・購買部・理髪部・合宿室・茶室・宿泊個室など、多目的な利用が可能な設備があり、人々の交流の場となった。

中央講堂は、1964年12月ごろに取り壊された。写真③の車道と中央分離帯の一带は、その跡地にあたる。クラーク像からクラーク会館にかけての道幅が広く、空間がひらけているのは、かつての中央講堂の名残だといえる。

(佐々木)

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

1970年代の受講ノート ～木村光彦氏寄贈資料から～

4月4日、木村光彦氏(経済学部1974年卒業)から、教養部や経済学部での受講ノートをご寄贈いただきました。試験問題など、当時の配布プリントも挟み込まれています。



受講ノート
「経済変動論 経済特講」「社会政策」「賃金論」「ドイツ語」

受講ノートには、「経済変動論 経済特講」(早川泰正教授)、「社会政策」(新川士郎教授)、「賃金論」(荒又重雄助教授)、「日本経済史」(長岡新吉教授)、「西洋経済史」(石坂昭雄助教授)、「ドイツ語」(新妻篤助教授)、「憲法」(深瀬忠一教授)などがあり、当時の講義の様子を伝えています。

たとえば、「経済変動論 経済特講」のノートには、戦後日本経済についての記載があります。早川教授が前年に上梓した『戦後日本経済と景気理論』との関連がうかがえ、経済学部における講義と研究成果との繋がりが見えて取れます。(佐々木)

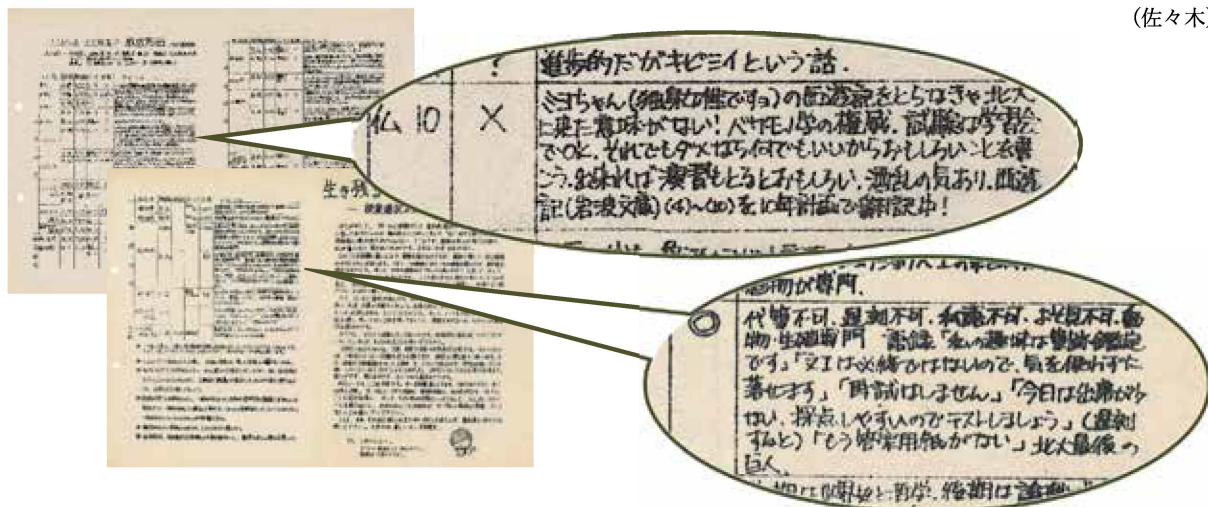
1984年の「鬼仏表」～沖高行氏寄贈資料から～

3月20日、沖高行氏から、在学中の1980年代に学内で収集したパンフレットやビラなどを受贈しました。その中には「恒例鬼仏表 北大教養部教官列伝 一九八四年版」があります。鬼仏表とは、試験方法や欠席の可否などから単位取得の難易度を示したものです。

表を作成したのは1983年度の1年2組の学生で、試験を終えた20名へのアンケートをもとにしています。表には「科目名」「教官名」「平均点」「モ

ード」「出席」「ひとこと」の記載欄があり、「出席」の有無は○×で示しています。「モード」はアンケートの回答中最も多かった評価とその数です。数が多いということは、受講者が多く、かつ意見が一致したということでしょう。「ひとこと」には、試験内容から普段の授業の様子まで書きこんであります。

講義内容の面白さや人気ぶりなど、学生から見た教員や授業の評価を読み取ることができます。(佐々木)



「恒例鬼仏表 北大教養部 教官列伝 一九八四年版」

上拡大図:「中国文学」を担当した中野美代子教授の欄。アンケートに回答した20名中、10名が「仏」と評価
下拡大図:「一般生物」を担当した青戸啓爾教授の欄。「一般生物」の「モード」欄には、「誰にあたっても鬼」

〔活動紹介〕 日誌 pick up

北大祭で特別展示を開催

6月7日(金)～9日(日)、第61回北大祭において、特別展示「北大生の御用達！ 新聞広告あれこれ 1926-1945」(於：大学文書館1階会議室)を開催しました。

展示では、『北海道帝国大学新聞』掲載広告のパネルを「北大界限」「札幌駅前通り界限」「南1条通り界限」「狸小路・すすきの界限」の4ブロックに分けて掲示し、店の位置を1936年札幌市街地図の上にマークしました。あわせて、文書・日誌・絵はがきなど関連する資料を陳列しました。(廣瀬)



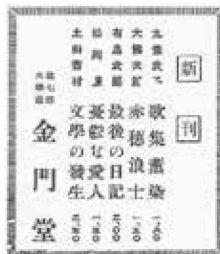
本展示は次のイベントでも開催します

8/4(日)・5(月) オープンキャンパス
9/27(金)～29(日) ホームカミングデー



岩井靴店(南1西2)

札幌農学校の靴職人が創業者の、北大ゆかりのお店



金門堂書店(北8西4)

“キンモドウ”と呼んでいたと見学者からのお話



サッポロビール

狸小路2丁目の直営ビヤホールは学生コンパにぴったり



竹家(北9西4)・芳蘭(南4西4)

予科のクラス会(1930-40年代)

竹家は1922年創業で、札幌の「ラーメン」発祥の店という逸話が残る



五番館(北4西3)

店前をあるく生徒たち(1927年頃)

1906年開業の道内初の百貨店。恵迪寮の日誌にインクや米を購入した記録がみえる



編集準備室日誌

- 2019. 1.23. 神戸大学大学文書史料室視察(室員3名)
- 2019. 1.24. 大阪大学アーカイブズ視察(室員3名)
- 2019. 1.24. 研究会「大学沿革史編纂の現状と意義」参加(於：近畿大学、室員3名)
- 2019. 1.31. 『北海道大学150年史編集ニュース』第2号を発行
- 2019. 2. 9. シンポジウム「アジアから見た《大

学演習林』」参加(於：九州大学福岡演習林本部、室員2名)

- 2019. 4.15. webページで「資料でたどる北海道大学の歴史」の一部公開を開始
- 2019. 6. 7. 第61回北大祭にて特別展示を開催(～9日)
- 2019. 7.19. カルチャーナイトにて夜間展示公開・特別展示を開催

お知らせ

オープンキャンパス2019

8月4日(日)・5日(月) 8:30～17:00

展示解説ツアー「北大の歴史を知る」

①10:30～ ②12:00～

③13:30～ ④15:00～

※各回1時間程度(途中参加・退場は自由)

ホームカミングデー2019

9月27日(金)～29日(日) 9:30～16:30

特別企画展示 予告

今年は、北大が新制大学となって70年目、
“北大紛争”から50年目にあたります

1949年5月31日、新制北海道大学、設置

北大には戦前から女性が入学していましたが、ごく限られたものでした。戦後に男女共学が定着するまでの、教職員や学生の難難辛苦を振り返ります。 **8/4～開催**

1969年4月10日、一部学生が入学会場を封鎖

建物封鎖・授業休止・団交・機動隊導入へと展開していった“北大紛争”を、ビラ・写真・新聞スクラップなどの資料でたどります。 **9/27～29 開催**

探しています

教養部の時間割

大学文書館では、教養部が旧蔵していた時間割表の綴りを保存しています。ただし1949～1955年・1976～1995年分はなく、1956年～1975年分も一部の学期が欠けています。時間割がお手元にございましたら、ぜひお知らせください。



教養部時間割表の綴り

表紙図版——遊戯会から北大祭へ

- ・新渡戸稲造が描いた第1回遊戯会の図(1878年)
- ・遊戯会で茶や弁当を販売した“喫茶亭”(1900年頃)
- ・第35回遊戯会の水産学科生徒の仮装行列(1918年)
- ・クラーク博士胸像の再建除幕式を行った第2回大学祭(1948年)
- ・第17回北大祭での教養部学生の仮装行列(1975年)
- ・第59回北大祭のインターナショナル・フード・フェスティバル(2017年)

編集後記

◇本号巻頭は、1954年度入学者である林恒子氏にご執筆いただきました。

◇表紙は、札幌市民も集う年中行事となった遊戯会(1878～1922年)と、戦後の大学祭(1946年～)をとりあげました。第1回遊戯会の図は盛岡市先人記念館からのご提供です。

〔お詫びと訂正〕

本誌第2号の下記部分に誤りがございました。関係者のみなさまにお詫び申し上げます。なお、正誤表は当室ホームページに掲載しております。

- ・3ページ右段18行目～21行目
- ・7ページ図版の説明文

北海道大学150年史編集ニュース 第3号

発行日 : 2019年7月31日

編集・発行: 北海道大学150年史編集準備室

〒060-0808

札幌市北区北8条西8丁目

北海道大学大学文書館内

開室日 : 平日(月～金) 9:30～16:30

(祝日、年末年始12/29～1/3を除く)

TEL/FAX : 011-706-2395

E-mail : hu150@archives.hokudai.ac.jp

URL : <https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150.html>

